

秋期報告書 2017年11月

村上 愛

渡米してはや3か月以上、ミシガン湖畔の街に初雪が降ったのは既に数週間前である。日中の気温も氷点下を記録するようになり、厳しい冬の到来を予感させている。

厳しいのは寒さだけではない。教育が日本とは異なる意味で非常に厳しい。事実、留学前には「1年生は大変だから、、、」と留学経験者の方から口々に忠告を頂いたものだが、想像を凌駕する厳しい教育によって圧倒的な成長の予感を感じている

現在、経済学部の1年生はコアコースと呼ばれる3科目、(ミクロ経済学、計量経済学、マクロ経済学)に専念している。週2回の授業では、今後の研究の礎となるよう基礎的な概念を全て網羅する。そして、各科目を担当する教授陣は経済学会で知らぬ人がいないような数々の素晴らしい研究を遂げた大御所ばかりだ。例えばミクロ経済学を今期担当している Eddie Dekel 教授は、意思決定理論において非常に多くの業績を築き、経済学の学会の中でも最も権威ある学会のひとつ、Econometric Society の会長を現在務めている。Dekel 教授の授業は独特で圧巻される。授業で難易度の高い(日本の大学院では扱わないような)内容をあつという間にカバーしていただくだけではなく、経済学の理論家たる心構えを同時に語る:定理をみたら、まずどの仮定を弱めることができるか考える事、経済学の美しさとは理論によってどんな社会現象をも分析対象にできること、などなど。学ぶことは多く、留学した甲斐がある、と感じる瞬間である。

Dekel 教授が初回の授業に述べた言葉は非常に印象的で、1年生が直面する厳しい教育を端的に表現している。「企業の CEO のように昼夜を問わず勉強すること、ただし、休息はとるように。」実際、いまだかつてこんなに時間が足りないと思ったことはないのではないかと、というくらい勉強のための時間が必要で仕方がない。まず、課題の量が多い。多いだけでなく、見たこともないほど時間のかかる問題ばかりがでる。次に、グループワークに時間がかかる。実は、1年生は原則グループごとに課題を提出することになっているのだ。グループにもよるだろうが、私のグループでは各自が問題を解いた後にミーティングを開き、全員が納得するまで議論を繰り返す。熱がこもると数時間以上食事もとらずに議論を続けることもある。加えて、四学期制を採用しているために、頻繁に試験が実施されることも時間を圧迫する要因となっている。ほぼ5週間に1回定期試験があるため、試験勉強に要する時間も確保しなければいけない。

実のところ、なぜ時間の不足によってこちらの教育を厳しいと感じるのか初めはわからず、戸惑いすら覚えた。今は、根本的に日本の教育と異なるところに重点があると考えている。日本ではいわば時間をかけても1人で精緻な議論を展開する能力が重視されていた。しかし、ここでは精緻さよりも要点を効率的にかいつまんで扱う能力が求められているように思う。膨大な量の課題とグループワークを前提とした授業と課題の構成は、1人で全ての問題を完璧に解ききる能力よりも、自分が理解している要点を即座に伝えたり、他者の説明を瞬時に理解したりするための能力を伸ばすために設けられているのだ。今まで訓練されることのなかった能力が今鍛えられているがゆえの苦しみを味わっていると思う。しかし、この教育目的の違いを理解して以来、絶え間なくふりかかる難題を前に、「今まさに成長している、このためにここまで来たのだ」と力強い気持ちで奮い立っている



経済学 Ph.D. コースの1年生専用のグループ学習の部屋のひとつ。中央に長机、それを取り囲むように白板が用意されている。マーカーや紙といった備品もオフィスから提供されている。



キャンパスに複数ある図書館のひとつ。集中して勉強したいときは図書館を利用している。電源が床や壁、机の上などありとあらゆる場所に配置されており、PC を利用する際にも便利な仕様となっている。図書館にもグループワーク専用の部屋は多く、オンライン予約もできる。試験期間は図書館の24 時間利用も可能。



ある日の勉強風景。利用する建物は全面ガラス張りの空間が多く、晴れた日には明るい日の光が屋内にいても楽しめる。外に出る時間がとりにくく、また、寒さのために屋外に長時間いるのが厳しい環境のため、このように日光を楽しめる仕組みは気分を明るく保つうえでもとても役立っている。